

変容するシェルパ社会

池田常道（日本山岳会会員）

1 エヴェレストのリンチ事件2013

一昨年春のことである。エヴェレストのローツェ・フェースで順応行動していたクライマー3人が、7,200メートル付近でルート工作していた公募隊シェルパの一団に遭遇した。彼らの順応キャンプはそれ以前に設営されていたが、この日シェルパが張っていた固定ロープをはさんで反対側にあったので、3人は無造作にロープをまたいで通過しようとした。イタリアのシモーネ・モーロ、スイスのウエリ・シュテック、イギリスのジョナサン・グリフィスのトリオはロープを結び合わず、固定ロープにもさわらずに、その左数十メートルのところをフリーソロしてきたのである。ところが、その行動を見咎めて、リードしていたシェルパが激昂して「(オレたちの)ロープにさわんな！」と大声を上げながら、なんの確保もなしに斜面に立っていたシュテックに向かって体当たりするような勢いで懸垂下降してきて、ピッケルで雪面を激しく叩きながら威嚇した。シェルパは、両手を突きだして防御しようとしたシュテックに「オレにさわんな！」と罵声を浴びせてきた。

そこに駆け付けたモーロとグリフィスも含めて、その場は、いささか穏やかならざる口論で終わったが、3人がウエスタン・クウムのC2に帰ると100名あまりのシェルパが集まり、不穏な空気を漂わせていた。テントに押しかけてきた一団は謝罪を要求して小突き回し、刃物をちらつかせ、はては殴打やキック、投石で攻撃を繰り返した。テントの奥に避難したのを引きずり出しては糾弾を続けた。一部の欧米クライマーが間に入って両者を分け、3人にすみや

かにBCまで退避するようながした。夕闇迫るなか、3人はアイスフォールを下ってBCに帰った。それも、他のシェルパに遭遇するといけないので、出来上がっていたルートは使わずにロープもなしで。

事態を重く見た観光省は数日後、間に入って手打ち式を演出し、当事者に加えBCにいた公募隊隊長たち全員の署名がある和解書を作成した。事件を起こしたリードシェルパら3人はこのシーズンのBCから追放され、登山は再開された。

事件のあったころ、エヴェレストの新ルートに挑もうとモーロたちと登山許可を共有するカザフのデニス・ウルブコは、休養のためディンポチェに下りていた。BCに帰ろうと登っていく途中で下りてくる二人のシェルパに遭遇した。彼がモーロの仲間であることを知っていた二人は、外国人旅行者も行きかう道端でズボンから一物を取りだして見せびらかし挑発してきた、とウルブコのブログにある。

事件の発端は、ネパール語を解するモーロが「マザーファッカー」と言って侮辱したとか、氷塊を落として下のシェルパを負傷させたとか言われているが、その根底には、自分たちがふだん相手にしている公募隊の顧客とちがって勝手に山を上下する登山者に対する反感があったものと思われる。ネ政府は、シェルパたちがルート工作を終えるまで彼らの先に出てはならないと規定している。また、安全のためにシェルパガイドが出す指示に従わなければならないとも。しかし、これは公募隊に対して通用する規定で、自力で登れる登山者に適用するには無理がある。かつて欧米人ガイドに協力してルート工作して

4. その他

いたシェルパたちは、いまや自力でそれをこなせるほどに進歩した。毎シーズンやってくる公募隊しか経験のない若いシェルパは、未熟な顧客しか見たことがないから、外国人登山者とは、自分たちが張ってやった固定ロープをユマールで登り、自分たちが担ぎ上げてやった酸素ボンベを吸いながら頂上に登るだけの存在になっているのかも知れない。そこに、ある種のおごりが生まれても不思議ではない。

2 雪崩事故と登山ボイコット2014

昨年4月18日の朝、クーンブ・アイスフォールで起きた雪崩は25人を巻き込み、13人が死亡、3人が行方不明、9人が負傷する惨事となった。エヴェレストにおけるシェルパの雪崩遭難としては、1922年英国隊の7人（ノース・コル下）、1970年日本スキー隊の6人（クーンブ・アイスフォール）、1974年フランス隊の5人（西稜肩の斜面）などがあるが、それらを大きく上回る最悪の事故である。負傷者のうち4人は肋骨や手足の骨折、肺の損傷、擦過傷などでカトマンズの病院にヘリで搬送され、怪傷の5人はBCの医療施設で手当てを受けた。

今回犠牲となった人々は、ベテランの高所シェルパからABCのキッチン要員までを含んでいる。すべて登山隊に雇用されたネパール人で、欧米人ガイドや顧客に犠牲者はいなかった。この時期は、ウエスタン・クウムのABCへ物資の荷揚げが急がれているときで、大半はBCに留まったり付近の山に高所順応に出かけていたりしていたからだ。アイスフォールの中にいた登山者も少数いたが、たまたま雪崩の本流から外れた場所を行動中だった。

アイスフォールでは、向かって左側、西稜肩の側壁直下をたどるルートが、近年もっぱら採用されている。氷河の動きが比較的安定していることもあって、大勢の登山者を上下させるのに都合のよい、ス

トレートなラインが採れるためだ。しかし2012年の春、ラッセル・ブライスの率いるHIMEX（ヒマラヤン・エクスペリエンス）隊は、ルートの危険を察知して、エヴェレストのほかローツェ、ヌブツェの登頂を目指していた隊員とガイド40人、そのシェルパを全員引き揚げさせたことがある。アイスフォールのルート選択が危険に感じられたのと、ローツェ・フェースに積雪が少なく、氷がむき出しになっていて落石の危険があると見たからだ。幸か不幸か、その年はなにごともしらなかつた。彼の懸念は2年後に的中してしまったことになる。

エヴェレストのアイスフォールは、もともと安全な場所ではない。大小の雪崩は過去にもしばしば起こってきた。たまたま、そこに人がいなければ事故にならないだけなのだ。こんにちのように、何十人という隊列が一本棒になって歩けば、事故に遭う確率は、まだ登山者が少なかった時代に比べて、飛躍的に高まる。ルートをアイスフォールの中央寄りに移せばいい、という意見もあるが、その分行程は長くなるから公募隊クライアントにとってはきつい登高になるし、ルートを保守するアイスフォールドクターの負担も増す。昨年春の外国人登山者は、31隊334人に昇ったという。これだけの人数を山の上で食わせるために、シェルパたちは、いったい何回危険地帯を往復すれば足りるのであろうか。現代のエヴェレスト登山が構造的にはらむ危険がここにある。

さて、捜索活動は、20日に13人目の遺体が発見された時点で打ち切れ、残る3人は行方不明のままとなった。ネパール当局は4日間の登山休止期間を設けて喪に服すことにした。これはすぐ7日間に延長されたが、その間にシェルパの間には、動揺が広がっていった。兄弟や友人が命を落とした現場に踏み込んでいくのに逡巡を覚えるのは当然だろう。ましてそのうち3人は、自分が踏みしめて行く氷の下

にまだ眠っているのだ。

BCで開かれた追悼集会は糾弾の場と化し、遺族への補償金増額、今季の登山中止などを骨子とした13項目の要求書が提出された。音頭を取ったのは、もっぱらクーンブ谷の外からきていた、若いシェルパたちである。彼らは、マオイストの影響が強かったマカルー地域の出身で、そんな時代に幼少期を過ごしていたから、クーンブ谷の伝統的シェルパ社会に育った者とは考え方も異なっている。マオイストとの内戦は2006年に終わったが、それまでに受けてきた教育は、彼らの思想に深く影響を及ぼしている。

犠牲者の遺族に対する補償要求は、同時にシェルパの待遇改善や地位向上への欲求とつながっている。休止期間中に自宅に帰っていたシェルパたちに、彼らは、登山に復帰しないよう圧力をかけた。公募隊リーダーとの個人的結びつきや、今回の登山で得られる収入に未練を残す者がいなかったわけではない。しかし、こういった人々に対しては家族にまで危険が及ぶぞ、という脅迫も行なわれた。結束を乱す者は許さないという空気がシェルパたちの間に強く立ち込めた。

当局は代表者をBCに派遣してシェルパグループや公募隊リーダーたちと協議、補償金400米ドルの支払いと保険金の増額を約束して説得を試み、登山の再会をうながしたものの空振りに終わった。ラチがあかないと判断した大手公募隊は次々に登山中止を決め、すでに荷揚げしたウエスタン・クウムから物資を回収するためにヘリを呼び寄せた。他の公募隊もあいついでこの動きに追随し、この春のエヴェレスト登山は史上初めて、人為的な問題で中止に追い込まれた。ネ政府は、今季の登山を中止した登山隊に対して登山料の払い戻しはせず、向こう5年間有効の登山許可を保証した。アイスフォールドクターたちは、5月8日から固定ロープやハシゴの撤去を開

始した。その膨大な装備は、ゴラクシェップの倉庫に眠ることになった。それが再び使われるのはいつになるのか、いまのところ分からない。

ネパール政府には、毎年莫大な登山料が外国登山隊から支払われる。昨年の場合で言えば、エヴェレストだけで356万米ドル（約3億6,000万円）に達し、そのすべてが国庫に入る。2012年の統計だが、保険料・ポーター賃・共同装備・航空運賃などの関連収入を含めたヒマラヤ登山の経済効果は1,164万米ドルになるという。マオイストならずとも、シェルパの不満は、それが身を削って危険な職業に就いている自分たちにどれだけ還元されているかという点にあるのだろう。登山料収入から一定の分け前を政府に要求する気持ちが生まれても不思議ではない。

有力公募隊に毎年雇われているクーンブの高所シェルパは、ラッセル・プライスの言によれば、6,000米ドルを手にするという。ネパール人の平均年収700米ドルからすれば莫大な額だ。彼らはそれを元手に手広くロッジや売店を営み、一家の収入としている。息子を高等教育に送る余裕もある。一方、ネパール人が経営するローバジェット（格安）の公募隊に雇われるシェルパが手にするのは800米ドル程度に過ぎない。彼らの雇われているエージェントは、欧米公募隊の30%程度の価格でお客を集めているからだ。カミさんにロッジをやらせようとしても元手はできず、そもそもお客の集まるような街道筋に実家はない。貧富の格差は拡大するばかりだ。今回の犠牲者が大部分一家の大黒柱だったことを考えると、収入の道を失った遺族への補償金が400米ドルで十分はない。稼ぎ手を失った遺族はこれから何年も家族を食べさせ、子どもを学校にやらなければならないのだ。

登山ボイコットに至る過程で明らかになったのは、富める者と食えない者が混在するシェルパ社会の二

4. その他

極構造だった。ヒマラヤ登山は金になると知って参入してきたシェルパや他の近隣民族のなかには、経験も判断力も技術も、ときには体力さえも劣る者がまじっている。BCやABCで、急性高山病以外の原因で病死する例が最近が目立つ。

食えるシェルパのなかにも異なった反応が生まれている。命と引き換えに危険な労働に従事することを、息子たちに味あわせたくないと考えようになったのは、肋骨を折ってカトマンズに入院しているカジ・シェルパだ。彼は氷塊に胸を打たれ、固定ロープにつかまって助かったのだが、「二度と山には戻らないし、二人の息子も登らせない」と語る。ちゃんと教育を受けて、まともな職業に就いてほしいとも。一方、ダワ・タシは60歳になるまでこの稼業を続けると語る。家が貧しかった彼は17歳でポーターになり、エヴェレストには6回登り、年7,000米ドルを得るまでになった。「カトマンズに家を買って、4人の娘を学校に通わせる」までになった。「娘たちに携帯電話を買ってやれたのも、シェルパ稼業のおかげさ」ということだ。

シェルパ族は、ネパールの総人口2,650万の1%に満たない。しかし、彼らがヒマラヤ登山で稼ぎ出す外貨は、国の収入の重要な部分を占めていることはたしかだし、ネパール政府は、金づるのヒマラヤ登山を捨て去るわけにはいかない。巨大ビジネスに発展したエヴェレスト登山から得られる上がりをどう還元してゆくのが、いま問われている。危険な職業に従事する労働者の賃金と補償は、労使双方を満足させるレベルになければならない。